

『更級日記』における四季と和歌

安 貞 淑

平安女流文学作品の特徴の一つに繊細な四季の感受をあげることが出来る。『更級日記』の作者孝標女は、四季の中でどの季節が一番感心を寄せていたのであろうか。その答えは、作者自身、春秋のさだめの場面で春の夜を選んでることから、一見あきらかなようだが、彼女の実人生の日記には、春の夜の場面は描かれていない。

また、『更級日記』には連歌形式の一首をふくめて、全部で八八首の和歌が記されている。藤岡忠美氏(注)が「王朝女流日記と和歌」において、女流日記文学における和歌を、国歌大観から調べた結果を示しておられるのによれば、『蜻蛉日記』二五九首、『紫式部日記』一八首、『和泉式部日記』一四五首、『更級日記』八八首、『讃岐典侍日記』二三首となる。さらに、作品の分量を考慮して、その頻出度を日本古典文学大系本によって計算してみた結果、『蜻蛉日記』0.84、『紫式部日記』3.72、『和泉式部日記』0.33、『更級日記』は0.63ページに一首の割合を見せ、最も頻出度の高い『和泉式部日記』に次いで、『更級日記』『蜻蛉日記』の順であることがわかる。そこで、『更級日記』における四季と和歌を見た場合、『更級日記』には冬の記事が最も多く、和歌を内容の面から見たとき、四季の景

物を詠み込んだ歌が多い。これは、女流日記の中でも、『蜻蛉日記』の、夏、秋、春、冬の順に比べれば対照的であり、和歌でも月を詠んだ歌がただ二首しかない『蜻蛉日記』に対して『更級日記』では一〇首も詠まれ、両作品の四季と和歌の対照が興味深い。

本稿では、このような『更級日記』における歌の位相を考慮した上、日記全体における四季の構成を考察し、その四季の場面で詠まれた和歌を通して孝標女の四季意識を考えたい。

考察方法は、①四季の場面で詠まれた和歌を季節別に分類（連歌一首は除く）②作者と他人の歌の区分③四季における和歌の独詠歌、贈答歌、贈歌などの分析④和歌の詠まれた場所⑤和歌に詠まれた四季の景物⑥和歌の年齢別分布など、和歌から見た四季の特徴を見ていく。

まず、『更級日記』の八七首の和歌を詠まれた季節別に分類した。これは表(1)として本稿末尾に記載しており、歌は紙面上初句のみを記した。

次に、表(1)から、四季の場面で詠まれた和歌の特徴を整理したのが表(2)である。

表(2) 四季と和歌

⑦	⑥					⑤			④			③		②	①	*場面数			
	勅選所収歌	五十代以後	四十代	三十代	二十代	紅雪	花月	紅葉	旅先	宮家	家居	贈歌	贈答歌	独詠歌	作者・他人			和歌	
1	0	2	1	0	7	0	⑩	0	5	1	1	8	3	3	4	10	14	14	春 (1~3月)
1	0	0	1	0	7	0	1	0	1	6	1	1	1	3	4	8	10	11	夏 (4~6月)
④	0	3	1	3	9	0	3	0	0	⑪	1	4	4	4	8	16	20	32	秋 (7~9月)
3	1	3	⑦	2	7	2	3	2	0	6	5	9	④	⑦	9	20	⑩	⑥	冬 (10~12月)
1	1	4	1	4	1	1	1			4	6		③	⑦	10				
2	2	4	1	2	2	0	2	0	0	3	0	8	4	2	5	11	13	14	季節不明 ?
1	1			1						1	1		2	2		2			
11	3	12	11	7	⑫	2	⑨	6		28	11	26	16	16	⑬	65	87		
1	1	3	4	4	10	1	①	2	1	3	4	15	3	22	22				

表(2)では、各季節の特徴的な項目に○をつけているが、まず、その数字の上から見た特徴をとりあげておきたい。

*は、『更級日記』の本文を一四三部分にわけ、その総場面数から四季の場面を分類したものである。すると、春一四、夏一一、秋三二、冬六一、季節不明の場面が一四となり、冬の記事が最も多いことが確認できる。

①は、四季の場面で詠まれた和歌を詠まれた季節別に分類したもので、春一四首、夏一〇首、秋二〇首、冬三〇首、季節不明一三首となり、やはり、冬の場面の歌が多いことがわかる。

②では、作者の歌と他人の歌をわけた。上段は作者の歌数であり、下段は他人の歌数である。そうすると、作者の歌は、春一〇首、夏八首、秋一六首、冬は二〇首と多く、季節不明場面一首を合わせれば、総歌数六五首となる。

③では、独詠歌、贈答歌、贈歌などを分類したが、独詠歌は春四首、夏四首、秋八首、冬九首、季節不明歌五首で、八七首中、三四首が詠まれている。これは二五九首中、二五首しかない『蜻蛉日記』とまた対照的である。贈答歌と贈歌は分類しがたいが、ここでは、返歌のない場合を贈歌とみた。すると、贈答歌は、春七首、夏五首、秋八首、冬一四首となり、冬の場面に多く、贈歌は冬の場面に他人の三首が見られる。

④は、和歌の詠まれた場所であるが、春は家居での歌が多く、夏は限られた東山滞在時の歌が始どであり、秋は四季の中で、旅先の歌が最も多く詠まれている。ここで旅先とは物語でへの道で詠まれた歌も含む。そして、冬は、他の季節より宮仕えの歌が多いこと

にも注意したい。

⑤は、和歌に詠まれた四季の景物であるが、本文から四季を代表する自然物象「花紅葉月雪」をとりあげて項目にした。すると花は、作者の歌に、春五首、夏一首詠まれている。紅葉は十月に詠まれ、冬の場面に二首見られる。月は、夏一首、秋三首、冬四首、季節不明二首で、八七首のうち、作者九首と他人一首の、一〇首が詠まれている。ここで、とくに注目すべきことは、月が九首も詠まれているのに、春には一首も詠まれていないことである。

⑥は、年齢別四季の場面で詠まれた和歌数である。ここでは一〇代に四季それぞれの場面で多くの歌が詠まれているが、それは、作者の総歌数六五首中三三首という、ほぼ半分を占めているもので意味深い。こういった年齢別和歌の分布から孝標女の回想意識は、物語や歌の世界に夢中になっていた一〇代の記憶が最も強烈であったことがわかってくる。そして三〇代にも、七首と多く、そのうち、五首が宮仕えでの歌である。

⑦では、勅撰集に収録された歌を季節別に分類した。そうすると、春一首、夏一首、秋四首、冬は作者三首と他人一首である。また、この三首中、一首は春の歌である。

では、この表(2)の特徴を中心に具体的に考察していく。

一 春の場面の歌

まず、春の場面の歌には、表(2)の⑤から春の月夜が詠まれていることが注目される。これに関しては、本文から四季に関する描写をあげてみたい。

『更級日記』における四季と和歌

(a) 春秋のことなどいひて、「時にしたがひ見ることは、春霞

おもしろく、空ものどかに霞み月のおもてもいと明うもあらず、
遠う流るるやうに見えたるに、琵琶の風香調ゆるかに弾きならしたる、いとみじく聞こゆるに、また秋になりて月いみじう明かきに、空は霧わたりたれど、手にとるばかりさやかに澄みわたるに、風の音、虫の声、とりあつめたる心地するに、
箏の琴かきならされたる、横笛の吹き澄まされたるは、なぞの春とおほゆかし。また、さかと思へば、冬の夜の、空さえわたりいみじきに、雪の降りつもりひかりあひたるに、箏のわななき出でたるは、春秋もみな忘れぬかし」といひつづけて

(P八一―二)

これは周知のとおり、長久三年「十月ついたちごろのいと暗き夜」源資通が作者と同僚の女房に春、秋、冬の夜の情緒につき、語り合った場面である。よく、この場面は、王朝の典型的な春秋論に冬の季節が加えられたこと、そして楽器による季節の情趣が述べられたことがいわれる。この記事に続き、資通が「いづれにか御心とどまる」と二人に問うと、作者は、同僚の女房が秋の夜に心を寄せて答えたのに対して、

98 あさみどり花もひとつに霞みつつおほろにみゆる春の夜の月

と答える。つまり、この場面の春秋優劣論で孝標女は春の夜を選んであるわけだが、日記には彼女の好んだ春の夜の月夜は「一カ所も描かれていない。なぜ、春のおぼろ月夜を用いなかったのであるうか。これについては、すでに拙稿「『更級日記』の夜」において、こ

の歌が詠まれる前の「さのみ同じやうには言はじとて」という作者のことばから、春の夜を選んだのは必ずしも本意であったとはいえないということに触れた。そこで、本稿では、さらに描かれた春の場面の歌から孝標女の春の季節に対する思いを考えたいと思う。

『更級日記』の最初の春は、上京直後の継母との別れの場面から始まる。(歌に付した番号は筆者の本文区分によるものである。)

37 頼めしをなほや待つべき霜枯れし梅をも春は忘れざりけり
長い上京への旅を終え、物語がいっぱいあるという憧れの京にいたばかりの作者に継母は「これが花の咲かむをりは来むよ」と言い残して父と別れる。その年、閏年であつたらしく、年が改まつて、早く梅の花が咲いてほしいと、約束した継母を待ち続けていたのに、花もすっかり咲いてしまふけれども、便りもないので、この歌を贈る。

39 散る花をまた来む春は見もやせむやがて別れし人ぞ恋しき
それから、まもなくその春の「三月ついたち」に、まつさとのわたりで月に照らされた姿が印象深かつた乳母も亡くなつてしまふ。悲しくて、物語を読みたい気持ちも起らないまま、泣き通しているのに、夕日がとても華やかにさしており、桜の花がいつせいに散りみだれている風景をみて、この歌を詠む。

45 咲くと待ち散りぬと嘆く春はただわが宿がほに花を見るかな

この歌は、実際は39「散る花も」歌の一年後の春のことであるが、地の文の時節表現は「春ごと」とあつて、数年も経っているように感じさせる。これは、ただ一年しか経っていないけれども、「咲

くと待ち散りぬと嘆く」という表現から、継母との別れと、乳母が亡くなつた季節である春の哀傷が、執筆時の作者の意識に「春ごと」という反復的な表現として回想されたと思われる。

46 「あかざりし」の歌は、「三月つごもりがた」土忌に他へわたつて、帰つてきてまたの日、その家の主人に、桜の風景を詠んだ歌として、一見桜のめでたさを歌っているようだが、「散りがたにし」とあり、散る花を詠んでいるのに注意したい。51「にはひくる」の歌は、治安三年、四月の夜中、火事があつたが、その焼ける前の家を思い出したものである。昔の家は、春の花、紅葉の季節には四方の山々におとらないほど見事な景色であつたのに、新しい家は狭い所で木などもないので、情けなく思つていると、隣からおつてくる梅の香りに、もとの家を出しているのである。56「明るる待つ」の歌は、一八才の春、「二月の司召に」父の任官の失意に対する「同じ心に思ふべき人」との贈答歌である。この贈答歌から受領層の人々にとつて、司召はいかに切実な関心事であつたかがよくわかる。さらに、今まで春の季節に起こつた一連の悲哀にいつそう失意が加えられていく。67「契りおきし」は、一九才の春の歌で、去年、作者は東山に住む尼に「花盛りはまづ告げよ」など言い置いて帰つたのに、「三月十余日」過ぎてても何の連絡もないので尼にこの歌を贈る。100「加島見て」は三七才の「春ごろ」、宮家で資通との再会の機会があつたが人前をはばかって会えない場面の歌である。125「里遠み」は、四〇代の、ある「三月ついたちごろ」西山の奥に行つたときの歌である。この歌も春の花を詠んではいるが、地の文に「のどのどと霞みわたりたるに、あはれに心ばそく」とあつて、花の景色よりも人

影もない山路の淋しさを訴えているのである。127「袖ぬるる」の作者の歌は「うらうらとのどかなる宮」仕えでの生活を思い出し、二人の同僚に贈ったものである。

以上、春の場面で詠まれた歌の状況をみてみたが、春には、一連の別れや死別、そして父の任官の失意、かなわぬ恋と未練がましい宮仕え生活の思い出など、そのほとんどは満たされぬ思いや疎外感、または期待外れなどの心情が描かれている。つまり、春に対する作者の思い出は幼い時の喪失の記憶が強く、その意識は執筆時の作者の季節意識とつながっていると思われる。日記中、明るくて生彩に満ちた春のイメージといえは、初瀬に代参した僧の夢でみた鏡に映った光景―「いろいろの衣こぼれ出で梅桜咲きたるに鶯木づたひ鳴きたる」が浮かぶ。確かに、それは作者にとつて理想の世界であつたろう。しかし、彼女が日記の終わり頃に「ただ悲しげなりと見し鏡の影のみたがはぬ、あはれに心憂し」と述懐しているように、彼女の実人生の日記には、そのような明快な春の場面は描かれていなかった。しかも、王朝の春の夜といえは、彼女の耽読した『源氏物語』をはじめ、男女の恋の交渉が始まる場面が多く、そういった意味では恋の季節といつてもよいであろう。『更級日記』には、冬の場面で春の月夜の歌は一首詠まれているものの、実際、春の夜が描かれていないのは、孝標女が、むしろ、そのような春の月夜にはあまり関心がなかったからかもしれない。作者の描いた春の場面には少女期の暗い喪失の記憶が印象深く残っており、『更級日記』の主題意識から考えても、作者晩年の不幸の原因を過去半生の無信仰と物語耽読にあつたという、悔恨の人生には、王朝の春の朧月夜の

ような場面は執筆時の作者の脳裏に存在しなかつたのであろう。

二 夏の場面の歌

『更級日記』の夏の記事は四季の中で、最も少ない。しかも、一〇首の中、八首が東山滞在時の歌であり、年齢からいえば一八才の夏に集中している。この年、万寿二年は『更級日記』で唯一四季すべての場面が描かれ、感受性に富んだ一〇代の作者の姿が窺える。和歌を見ると、

42 時ならず降る雪かとぞながめまし花たちはなの香らぜりせ
ば

この歌は、橘の花を雪にみたてたもので、夏の景色を詠んではいるが、日記前後の内容とは何の関係もなく置かれている点で、よく『更級日記』の家集要素が指摘されており、「五月ついたちころ」という日付表現も目につく。57「たたくとも」、59「山の端に」、60「誰に見せ」、そして61の三首の歌は、東山の夏の自然に関するものである。58の二首は、霊山近くの石井に寄つたときの「しづくに濁る人」との贈答歌である。

夏の場面の歌の中で季節の情趣で注目されるのは、60「誰に見せ」の歌である。これは、東山の明け方の情景を読んだ歌であるが、地の文には、

(b) 念仏する僧の暁にぬかづく音のたふとく聞こゆれば、戸を押しあけたれば、ほのぼのと明けゆく山ぎは、こぐらき梢とも霧わたりて、花紅葉の盛りよりも、なにとなく茂りわたれる空のけしき、曇らはしくをかしきに、ほととぎすさへ、いと近き梢にあまたたび鳴いたり。

60 誰に見せ誰に聞かせむ山里のこのあかつきもをちかへる音

も (P 五十)

とあり、夏の夜が明けていく山際や「帯に茂つている木の上の空の様子」が描かれている。「花紅葉の盛りよりも」という表現から、作者によほどの夏の暁の景色が印象深かったことがわかる。ここで『更級日記』に見られる四季論についてであるが、前述の引用(a)に加えるならば、まさしく四季の夜の情趣論になるのではなからうか。しかも、(a)では楽器による季節の情趣が述べられていたが、この場面ではほととぎすの自然の音が楽器のかわりに描写され、聴覚の美をなしているのである。こうして見ると、『更級日記』の四季の美は春、夏、秋、冬の各季節の夜の空の情趣と音の美にあるといえよう。

なお、東山滞在時の夏の歌には57の「誰」、58の「しづくに濁る人」、59では、またその人との別れを惜しむ「心ほそさ」の心情、60の「誰」など、歌ごとにある人の存在が見られる。そして、人とは、特定の誰とは限らないが、これらの歌には山里生活での人恋しさの心情が集中的に、強く現れている。

つまり、作者の中の夏の季節といえは、一八才の東山での山里生活が最も印象深かつたろうし、その場面で詠まれた歌は、恋の歌に分類してもよさそうにさえ思われる。

三 秋の場面の歌

『更級日記』の秋の場面で詠まれた歌の特徴をみると、まず旅先で詠まれた歌が最も多いことに気づく。そして、秋そのものの情趣

を詠んだ歌が多く、中でも月を詠んだ歌が目につく。6「くちもせぬ」と7「まどろまじ」の歌は、上京の旅であり、62「秋の夜の」63「まだ人め」64「思ひ知る」、65「苗代の」は秋の東山での歌、69「いづことも」はある「旅なる所」から外へ移る時の歌、84「思ひ出でて」は、西山の家での歌、121「初瀬川」122「ゆくへなき」は再び初瀬詣での道で詠まれた歌である。そして、131「いかに言ひ」は和泉への旅先での歌である。これは表(2)の④に見られたように、春の歌には旅先での歌がただ一例しかないのに対して対照的である。つまり、时期的に春秋両方とも旅に適した季節であるが、作者の場合、秋に頻繁に旅に出たことになる。さらに、物詣での季節についてであるが、岡崎知子氏^(注四)は「平安朝女性の物詣」で『蜻蛉日記』『赤染衛門集』『枕草子』『相模集』『和泉式部集』『和泉式部続集』『和泉式部日記』『伊勢大輔集』『紫式部集』『経信卿母集』『更級日記』『弁乳母集』『御形宣旨集』『清少納言集』に見られる物詣でを表にしておられるが、そこから筆者が時節表現を調査した結果、平安朝女流文学にしばしば現れる物詣での時節は、春一七例、夏八例、秋二一例、冬が八例であった。要するに、物詣での時節は一般的に春秋が頻繁である。ところが、『更級日記』の場合、一二例の物詣での記事の中で春一例、夏一例、秋一例、冬四例、季節不明の記事五例が見られる。つまり、冬が多いということになるが、その中でも三例は十月の日付であることから、孝標女は、物詣でも春よりも晩秋から初冬にかけて頻繁であったことがわかる。

このような、作者の春秋意識は、次の鞍馬詣での記事からも明らかになる。

春ごろ、鞍馬にこもりたり。山ぎは霞みわたり、のどやかなるに、山の方より、わづかにところなど掘りもて来るをかし。出づる道は花もみな散りはてにければ、なにともなきを、十月ばかりに詣づるに、道のほど山のけしき、このころは、いみじうぞまさるものなりける。山の端、錦をひろげたるやうなり。

119 奥山の紅葉の錦ほかよりもいかにしぐれて深く染めけむ

(P九五)

これは 四〇才頃の、鞍馬詣での記事であるが、「春ごろ」と「十月ばかり」に二度参籠し、同じ場所の景色を描いている。春ごろの記事には、花もすっかり散りきってしまった道の情趣を感じており、「十月ばかり」には道の有り様や山の景色について、錦をひろげているようだという感動を記している。しかも、「十月ばかり」の場面には119「奥山の」の一首の歌が詠まれているのはきわめて印象的である。すなわち、作者は同じ場所の景色であつても、春よりも晩秋または初冬の景色により心を寄せていたのである。

次に、秋の情趣を詠んだ歌を見てみる。秋の月夜を詠んだ歌は次の三首であるが、特に、この三首は勅撰集に収録されているのが注目される。つまり、秋は、歌数に比して勅撰集に採用されている歌数が多くなっているのである。これは、秋の歌がより優れているということであり、いいかえれば、作者は秋に関心をよせていたことになるのであろう。

7 まどろまじ今宵ならではいつか見むくろとの浜の秋の夜の月

64 思い知る人に見せば山里の秋の夜ふかき有明の月

『更級日記』における四季と和歌

122 ゆくへなき旅の空にもおくれぬは都にて見し有明の月

その他、131「いかに言ひ」の歌は秋の夕方の風景を、48は「たなばた」に関する贈答歌、49は「萩の葉」、62では「鹿の音」、63と84では「風」、99「何さまで」では「時雨」となっており、王朝の典型的秋の景物が多く詠まれている。

四 冬の場面の歌

冬は四季の中でも、景物に乏しい季節であるが、『更級日記』には冬の場面が最も多く、冬の歌も多い。表(2)の特徴からいえば、宮仕え生活での歌が多く詠まれていた。それゆえに年齢的には三〇代の時の歌が多く見られる。その宮仕え関連の歌は、90「年は暮れ」以後、95、96、97、98、124の歌である。そのうち、95、96、97、98、124は宮仕え生活での同僚との贈答歌であるが、こう見ると、『更級日記』には資通以外、明らかな異性と贈答歌は見られない。

また、冬の場面には、他人の詠んだ贈答歌が三首入っているのも特徴である。この三首の贈答歌は、54の「そこはかと」、「住みなれぬ」、「見しままに」の三つである。これは姉の死後に継母、親戚の人、せうとからの、鎮魂歌のような贈答歌である。

次に、冬の場面で冬の歌でない季節の歌が詠まれているのも特徴的である。

82 涙さへふりはへつつぞ思ひやるあらし吹くらむ冬_の山里_を

わけて訪ふ心のほのみゆるかな木陰をぐらき夏のしげり

この歌は、修学院に入った尼との贈答歌で、作者が「冬_の山里」

生活を思いやって贈ったのに対して、返歌は「夏のしげりを」とい
う夏の歌が贈られ、従来不審とされてきたが、まだ明らかでない。
そして、資通との出会いの場面での三首がある。

(「あさみどり」は前掲)

98 今宵より後の命のもしもあらばさは春の夜を形見と思はむ
人はみな春に心を寄せつめりわれのみや見む秋の夜の月
冬の景物として雪は、55「雪降りて」と124の二首が読まれている。
冬の場面で、月の歌は四首詠まれているが、作者の歌は90「年は
暮れ」と142「ひまもなき」の二首である。そして、98の「人はみな」
の歌は、他人の歌となっており、前述した「あさみどり」の歌は春
の月である。

この月夜と関連してであるが、『更級日記』には夜の場面が多い。
しかも冬の夜が最も多いが、次の引用、77と95は、特に、冬の夜の
情趣が印象的である。

冬になりて、日ぐらし雨降りくらいたる夜、雲かへる風はげ
しうち吹きて、空はれて月いみじう明うなりて、軒近き萩の
いみじく風に吹かれて、砕けまどふがいとあはれにて、
77 秋をいかに思い出づらむ冬深み風にまどふ萩の枯葉は

(P六一)

冬になりて、月なく雪も降らずながら、星の光に、空さすが
に限なく、さえわたたりたる夜のかぎり、殿の御方にさぶらふ
人々と物語し明かしつつ

95 冴えし夜の氷は袖にまだ解けて冬の夜ながら音をこそは泣
け

(P七八)

77は「月いみじうあかうなりて」という雨、風ののちの、月夜の
場面であり、それに対して95は「月なく」という暗夜の情景なので
ある。こういった対照的な夜の情景から作者は月夜にせよ、暗夜に
せよ、いかに夜の世界に特別な思い入れがあったかがよくわかる。

紅葉は、27「嵐こそ」と119「奥山の」の歌であり、木の葉を詠ん
だのは66「水さへぞ」の歌である。この三例は日付が「十月」とあ
ることに気づくが、この「十月」の日付を作品全体から調べてみる
と、一〇例と一番多いことを指摘しておく。したがって、このよう
な日付表現からも作者は十月、つまり、晩秋または初冬の景色に最
も心を引かれていたことが確認できる。

また、冬の歌には、冬の自然物象を通して作者の心情の詠まれた
歌が多い。つまり、冬の場面の歌は、冬の山里の尼や周りの人々の
思い出と、三〇代の宮仕え生活での思い出が中心となつて詠まれて
いる。たとえば、亡くなった姉の思い出や尼になつた親戚への思い
やり、宮仕え生活での同僚との思い出など、周りの人間に対する関
心の深さが読みとれる。そして、116「音にのみ」の歌では、宇治川
を渡るとき、憧れつづけてきた浮舟への想念が詠まれており、82「涙
さへ」、142「ひまもなき」の歌は、用いられた「涙」の語が意味し
ているような、晩年の孤独な日々の心情が冬の夜に鮮明に現れてい
るのである。

結局、最も多い歌数で日記全体を流れる冬の季節は、『更級日記』
の象徴的な世界であり、中でも『更級日記』における初冬は、幼い
とき上総から物語の世界に憧れ、長々と上京記が書かれた季節であ
り、旅の季節であり、あの源資通と出会つた忘れられぬ季節であつ

たのである。

五 季節不明歌

最後に、季節不明歌については、(一)は全く推定できない季節の歌であり、(二)の中の季節については筆者の推定に留める。

53 うづもれぬかばねを何にたづねけむ苔の下には身こそなり
けれ

この歌は「五月のついたち」に姉の死後、地の文に「そのほど過ぎて」とあるから、四九日の法要を済ませた夏ごろの歌であろう。

68 竹の葉のそよぐ夜ごとに寝ざめてなにともなきにものぞ
悲しき

この歌は、「旅なる所」での月のころの歌で、秋山虔氏は、後に「秋ごろ、そこをたちて外へうつろひて」とあるから、この時期は夏といわれるが、「月のころ」という地の文の描写と歌の情趣から筆者は秋の夜と見る。

78 とどめおきてわがごと物や思ひけむ見るにかなしき子しの
びの森

子しのびを聞くにつけてもとどめ置きし秩父の山のつらき
あづま路

78は、父の任地である常陸の国から使者が持参した父の手紙に添えられた歌と作者の返歌であるが、「七月十三日下」って神拝という行事をして領内を巡察していたときのことだから、時間的に、秋に「とどめおきて」が詠まれ、冬頃に返歌「子しのびを」を贈ったのであろう。120「谷川の」の歌は「十月ばかり」の鞍馬詣でに続く

『更級日記』における四季と和歌

記事で、「二年ばかりありて」とあるから、二年後の秋の歌であろう。128「夢さめて」は宮仕え生活で苦楽を共にした友への歌であるが、よくいわれている小野小町の歌（思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを『古今集』恋）をふまえたもので「西へゆく月」の情趣は秋らしい。そして、140から143の歌は、夫に死なれた晩年の歌であるが、必ずしも154の歌に続く同じ冬の季節とは限らないであろう。

以上、ここまで四季と和歌の特徴を考察してきたが、四季全体の歌からもう一つ注目すべきことがある。それは、『更級日記』の四季それぞれの場面の歌の中には、ある共通点が見いだされる。それは、

春の場面の歌、

125 里遠みあまり奥なる山路には花見にとても人來ざりけり。

夏の場面の歌

57 たたくとも誰かくひなの暮れぬるに山路を深くたづねては

來む

秋の場面の歌

84 思い出でて人こそ訪はね山里のまがきの荻に秋風は吹く

冬の場面の歌

55 雪降りてまれの人目も絶えぬらむ吉野の山の峰のかけみ

ち

すなわち、これらの歌には、「山」（または山路、山里）と、「人」（または誰）、そして「訪ふ」（または来）といった類似語の組み合わせ

わけが見られ、内容からは、人に問われぬ山里の孤独という共通テーマが読み取れる。『更級日記』には山の語が三六例用いられているが、とくに、季節不明歌、

140 月も出でて闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね來

つらむ

この歌において、姨捨山は、この日記の書名の由来するもので意味深く、姨捨山の状況が晩年の作者の心境を象徴する場面だとすれば、各季節の「山」と「人」と「訪ふ」といった組み合わせの歌の意味合いも、『更級日記』の主題意識にかかわって考えるのではないかと考えられる。

『更級日記』の山里について、津本信博氏は「山里住まいで東国育ちの彼女には、その現実がより浮舟と自己とに酷似性を感じ、『源氏物語』の作者が華やかな京から一転して舞台を宇治の山里に設定した意味とも心情が重なり、孝標女は意図的に『更級日記』の中に数多く山や山里の描写を挿入した」と述べておられる。このように『更級日記』において、山里といえば、常に浮舟との関連性が論じられるが、本稿の結論から考えると、従来注目されてきた「山里」の意味合いは、「人」と「訪ふ」という組み合わせによって、より具体的に形成され、山里生活の孤独を読み取ることができる。これらの歌の状況を見てみると、55「雪降りて」は、作者一七才頃、姉の死後の一連の歌の直後に吉野山の尼を思いやって贈った歌であり、57「たたくとも」は、一八才の夏の東山での歌で、その「一月の司召」に父の任官の失意の記事に続いている。84「思ひ出でて」は、二九才の頃、父が常陸の任地から帰ってきた記事の直後に西山

の家での歌であり、125「里遠み」は、前述した四〇代のある春、西山の奥へ行ったときの歌である。こうして見ると、55、57の歌は一〇代のときの歌であり、84は二〇代、そして125は四〇代のときに詠まれ、作者は年齢季節を問わず、山里の孤独を詠み込んでいたことになり、構造的にも対応している。そして57、84、125三首が自らの孤独を訴えたのに対して、55では吉野山の尼の孤独を思いやって贈った、82「涙さへ」の歌に類似しており、尼の歌といえは、日記最後の歌143ともつながっている。すなわち、これらの歌はすべてが山里の孤独に関する歌であるが、57、84、125、140は自らの孤独を誰かに訴える形になっており、55の歌によって82、143の山里の尼とも関連していくのである。これらの尼の登場する歌の共通点は55の姉の死、82父の常陸赴任、143夫の死という作者に強い影響を与えたはずの事件の直後に置かれている点も注意される。おそらく、作者はその都度、宗教に関心を持ち、出家者の道を考えていたのである。しかし、143の尼への歌、

143 茂りゆく蓬が露にそぼちつつ人に訪はれぬ音をのみぞ泣く
が、作品の末尾に置かれたのは重大な意味があり、作者は日記の最後まで人訪れのない孤独を訴えていることには変わりはない。その心情は、ほかでもなく、人間に対する孤独感なのである。『更級日記』における四季と和歌についての考察より、孝標女の、人間に対する孤独や山里趣味が明らかに見てとれるのである。

注

一 藤岡忠美「王朝女流日記と和歌」『国文学』昭和四四・五月

二 本文区分は基本として内容転換ごとに細分した。そして、同じ内容でも場所が異なる場合(例：上洛記など)と、同じ場所でも内容が異なったり、日付表現が見られたりした場合も一部分と数えた。これを『日本古典文学全集』(犬養 廉校注・小学館)と対照してみると、次のとおりである。

(本稿の本文区分) 一〇二二(日本古典文学全集)、三〇七二二、八〇九二三、一〇〇四、一一六五、一七二二六、二二二八七、二九三四八、三五八八九、三九四一〇、四二五一一、四六七二二、四八五一一三、五二五一一四、五六六三一一五、六四九九一六、七〇一一七、七二四一八、七五七一九、七九八二二〇、八三三四二二、七五八二二、八九一〇二二、九八二〇二五、一〇一六二二六、一〇七二六二七、一一七二二二八、一二三二二八二九、一二九三三三〇、一三三三四三三、一三五三八三三、一三九三三三、一四〇四三三三

三 拙稿「『更級日記』の夜」『新樹』梅光女学院大学大学院第十輯 平成七年九月

四 岡崎知子「平安朝女性の物語」『平安朝女流作家の研究』昭和四二 法蔵館

五 秋山虔『更級日記』新潮日本古典集成 平成四年
六 津本信博「『更級日記』の山里」『日記文学研究第一集』所収

新典社 平成五年
本文引用は『更級日記』新潮日本古典集成(秋山虔校注)による。